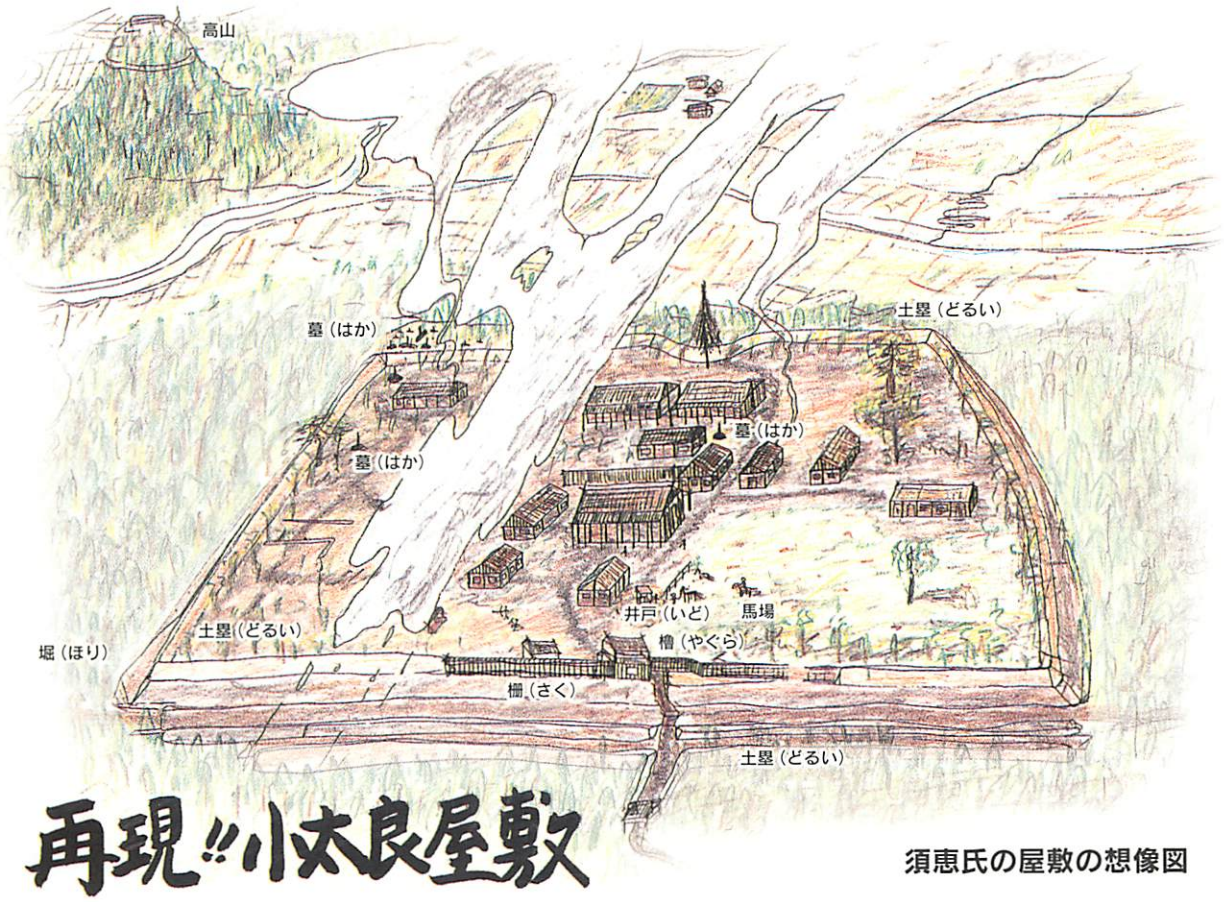
文化財通信くまもと

第 10 号
平成８年３月
熊本県教育委員会



再現!! 小太良屋敷

須恵氏の屋敷の想像図

小太良とは、今から800年ほど前の平安時代の終わりから鎌倉時代の初めにかけて、人吉盆地の内外で活躍した須恵小太良のことです。本名は藤原家基といいますが、普通は、「須恵小太良さん」や「小太良さん」と呼ばれていました。その「小太良さん」、といっても偉いお方で、「郡衙」というお役所の総元締め「郡司」という役職にあって、いろいろなご苦労をなさっておりました。

実は、深田村灰塚遺跡から、そんな「小太良さん」のお屋敷が見つかったのです。そこからは、たくさんの家の跡、穴蔵の跡、たくさんの数のお墓、井戸跡、柵の跡、使い方がわからない「ただの穴」、周りを取り巻く堀や土手が見つかりました。また、一緒に掘り出された当時の品物の中には、中国から輸入され、日本各地に出回っていた白磁や青磁の壺や碗や皿など、滑石で作られた石鍋や硯など、高級品もたくさん含まれていました。まさに、往時の須恵氏の権勢を偲ばせる品々です。

そんな須恵氏の屋敷を、「再現!! 小太良屋敷」と称して再現させようと試みたものが、上の想像図です。ゆっくりご覧ください。後の相良頼景の奥さんになる「小太良さんの娘さん」も、柿ちぎりに興じる女の子として特別出演中です。

「文化財通信くまもと」第10号は、平成６年度に文化財調査第１係が行った発掘調査のうち、主要な遺跡についての概要を紹介します。

灰塚遺跡

所 在 地　球磨郡深田村字灰塚
調査面積　約6,000㎡
調査期間　平成６年４月～平成７年３月

深田村灰塚遺跡の調査は、平成５年９月に始まりました。以来これまでに、家の跡、穴蔵の跡、たくさんの数のお墓、井戸跡、柵の跡、使い方がわからない「ただの穴」、周りを取り巻く堀や土手が見つかりました。すべて平安時代の終わり頃から鎌倉時代にかけてのものです。これらを須恵氏の屋敷に関係するものだと推定しましたが、それは、次に挙げる理由からです。

大きなお屋敷であること　屋敷の周りは、堀が取り巻いていましたが、南北160㍍、東西100㍍という壮大なものでした。屋敷正面には、２本の堀と２本の土手が残っていて、往時を偲ばせます。

たくさんの家が建っていたこと　家は、直接、地面に柱を埋め込み、それから各種部材を組み上げる造りでした。床が地面よりも高い家、土間の家、軒が付いた家と付かない家、広い建坪の家から狭い家などなど、いろんな種類の家がありました。そして、それらの家は、大きく四つぐらいの群にまとめることができましたが、このまとまりを門周辺・事務所・奥・馬小屋付近として考えました。

高級品がぞくぞく出土すること　一般の人にはなかなか手に入れにくい品物がたくさん出土しています。その代表例が、中国から日本に輸入された白磁や青磁などの陶磁器類です。また、滑石という軟らかい石をくりぬいて作った鍋や硯もありました。

屋敷の向きのこと　灰塚遺跡の正面は、東の方を向いていました。それは、上球磨方面、須恵氏の領地である「豊永」の方向です。普通、「屋敷というものは、自分の領地を向いているはずだ。」と思います。

小太良の娘が屋敷近くに建てた寺　史料がないかを探していましたら、ありました。小太良の娘で、相良頼景の奥さん「青蓮尼」が須恵村陣に浄蓮寺を造らせていました。何と、その陣は灰塚遺跡の隣の地名なのです。「青蓮尼」は、自分が生まれ育ったお屋敷の隣を、お寺の場所に選んだのでしょう。

灰塚遺跡が語るもの　須恵氏は、古代、人吉盆地の政治・経済を取り仕切っていた豪族でした。「郡衙」というお役所で一番偉い「郡司」という役職にあったのです。灰塚遺跡でその須恵氏の役所兼自宅であるお屋敷が見つかったことは、古代から中世、地方にいた豪族（在地領主）の生活の様子を知る、ひとつのヒントにもなるのです。これまで、小太良さんにいろんなことを語ってもらえる、そんな期待でいっぱいな調査でしたし、今後もそんな調査になることでしょう。乞、ご期待!

青磁出土状況

当時の家（堀立柱建物跡）

神水遺跡・蚕業（蚕糸）試験場遺跡

所 在 地　熊本市水前寺６丁目
調査面積　約7,000㎡
調査期間　平成６年４月～平成７年12月

写真１　神水遺跡遠景（南西上空から）

神水遺跡と蚕業（蚕糸）試験場遺跡は、新県庁舎建設に伴って、発掘調査を行いました。

二つの遺跡は同じ県庁舎の敷地内にありますが、遺跡の名前が違います。県庁南側の外来者駐車の部分が神水遺跡で、旧県庁北側職員駐車場の箇所が蚕業（蚕糸）試験場遺跡です。

写真１は神水遺跡の調査箇所を南西上空より撮影

写真３　蚕業（蚕糸）試験場遺跡道路跡検出状況（西から）

したものです。写真の左上にある建物が県庁舎で、台形の土が露出している部分が発掘調査をした範囲です。

写真２は調査範囲を上から見たものです。写真には穴をほった跡が写っています。道路に近い箇所から、平安時代の建物跡が四つ見つかりました。丸い穴が長方形に巡っているのが掘立柱建物跡（穴に柱を立てる建物）です。左右の両端に一軒ずつあります。その建物の中間にある四角の大きい穴が竪穴住居跡です。四角の一辺がとぴだしているのは、古い家と新しい家が重なっているからです。

写真３は蚕業（蚕糸）試験場遺跡で、平安時代の道路跡を発掘しているところです。筋状に見えるところが道路跡で、地面が硬くなっています。

写真２　神水遺跡の遺構（真上から）

写真の人は道路跡の上にのっている土を移植ゴテで一枚一枚はがすように除いています。

写真４は道路跡の横で見つかった溝跡です。

写真４　蚕業（蚕糸）試験場遺跡の溝跡（西から）

陣山遺跡

所 在 地　熊本市水前寺公園28-51
調査面積　約7,000㎡
調査期間　平成６年５月～平成７年３月

陣山遺跡は熊本県庁の北側、旧むつみ荘の跡地にある遺跡で、勤労者福祉センター（熊本テルサ）の建設にともなって調査が行われました。

遺跡の周辺は、奈良・平安時代の県庁である国府や、国立の寺院である国分寺・国分尼寺など、古代肥後の重要な施設が集まっていました。つまり今の県庁周辺と同じような状態だったのです。では、この遺跡はどのような性格のものだったのでしょうか。調査では次のような遺構・遺物が発見されています。

● 家が建ち並ぶ住宅街
・竪穴住居　51棟
・掘建柱建物　３棟

竪穴住居はほとんどが小型（約３m四方の方形）で、全てに煮炊きのためのカマドがついています。

● 文字が書かれた土器など、特別な遺物が出土
・墨書土器

今日では、文字を書けることは珍しいことではありませんが、昔は僧侶や役人などの一部の知識人しか書けませんでした。出土品の中にはこのような文字がみられました。

「今」　地名？　最近まで遺跡周辺は今村と呼ばれていました。

「大寺」国分寺や国分尼寺で使われた土器？

「真吉」よいことがあるようにとの願いが込められた、昔の人のおまじない？

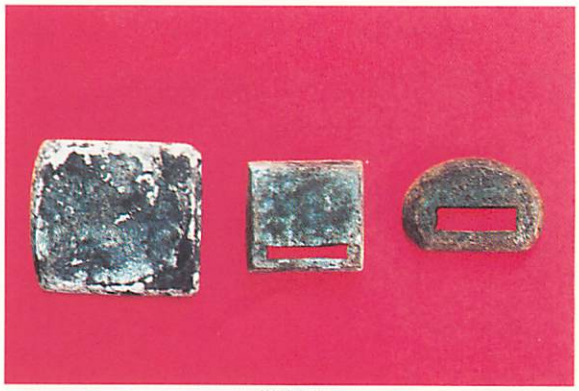
・帯金具（青銅製ベルト飾り）
役人の身分をしめす、ベルトの飾りです。
・緑釉
緑色のうわぐすりをかけた特別な土器です。
・刀子（鉄製ナイフ）、砥石
昔は紙が貴重品でしたので、代わりに板に書いて、ナイフを消しゴム代わりに使っていました。切れなくなるともちろん砥石で研ぎました。

・瓦（寺院や役所に使用されたもの）
カマドの部品として使われたものもあります。昔風のリサイクルでしょうか。

以上のように、普通の遺跡からは出土しない特別な遺物が多数出土しています。このことから、遺跡の周辺は、古代の役所や寺院に勤めていた役人や下働きの人々が、家族と暮らしていた住宅街であったのかもしれません。

遺跡の航空写真（北から）

ヘラ描土器（左：真吉　右：大吉）


帯金具

模様のある瓦

二本木前遺跡

所 在 地　阿蘇郡白水村大字中松字二本木前
調査面積　約6,000㎡
調査期間　平成６年５月～平成７年１月

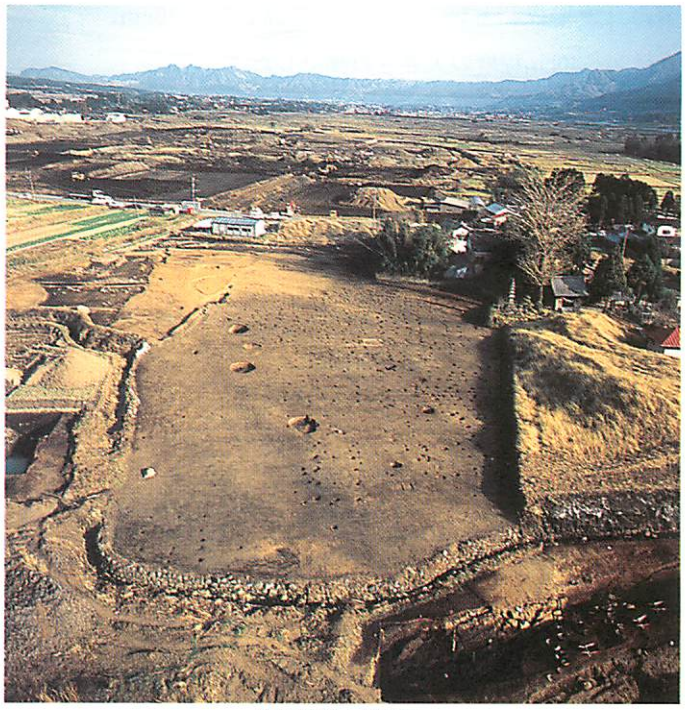
二本木前遺跡は平成６年度県営圃場整備事業（白水西部地区）にともない事前に調査されました。その結果、二つの性格のことなる遺跡が重なっていることがわかりました。それは鎌倉時代の武士の頭領の館跡とその後に建てられた寺院跡です。寺院跡は江戸時代まで続き、江戸時代には光照寺とよばれていました。それはこの地区の一画にある僧侶の供養塔に光照寺と刻印されていることではっきりしています。また、御寺という地区名もその名残でしょう。

館跡は外との境を幅５ｍ、深さ４ｍほどの逆台形をした濠で長方形に囲まれていることがわかりました。推定では100ｍ×150ｍの広さになるようです。内には今回調査した部分で約15棟の建物が並んでおり、また一辺が３ｍの正方形の井戸や館に住んでいた武士の墓も発見されました。そして、これらの遺構の中から中国製の陶磁器や白木や漆塗りの皿や椀、さらには下駄や箸などの遺物が発見されています。これらの遺物は当時の農民はもちろんのこと普通の武士でさえもてなかった品物です。このことや館の大きさから館の主は相当の力をもった武士の頭領であった可能性が強いのです。出土遺物が12世紀後半のものから見られることから平安時代の終わりには館があったことがうかがわれます。古代から中世にかけて当地方の武士の頭領といえば阿蘇氏です。そして、鎌倉幕府は阿蘇氏を南郷大宮司とよんでいます。これは阿蘇氏の居館が鎌倉時代には南郷谷にあったことを物語るようです。したがってこの館の主を推定する際、阿蘇氏は有力な候補になります。

寺院跡の遺構は館の敷地の上にかさなっており、今回調査した部分で約15棟の建物や地下式土坑が発見されています。地下式土坑はちょうど長靴のような形をしています。竪穴につづく横穴の床には丸太が敷きつめられ、その上に古銭の形をした青銅製の仏具とともに人骨片が発見されています。そして、竪穴の底に伏せた漆塗りの椀が置かれていました。大胆に推定すれば即身仏の跡の可能性があります。寺院の範囲については今回の調査でははっきりしませんでした。平成7年の調査が遺跡の北側でおこなわれ建物跡が続いているようです。おそらく寺院は館より広い範囲になるようです。

さて、この寺院を創建した年代と創建者は江戸時代に北山雪山によってまとめられた肥後の歴史書である『肥後国郡一統志』に登場しています。それによれば正平７年（1352）に阿蘇大宮司の女である賢可比丘尼によって建てられたと記載されています。この時期はすでに南北朝の動乱の時代に入っており、阿蘇氏も当主惟時が多々良浜の戦い（1336）で実子２人も亡くし、しかも北朝方に館を焼かれ、娘婿惟澄と共に居館をすでに矢部の地に移しているようなのです。その後南郷谷が惟澄の活躍により矢部方に平定された後、寺院が建てられているようです。

阿蘇氏の女がいったい誰でこの地に寺院を建立させた動機とはいったい何であったのか興味あるところです。



遺跡西側上空より

万楽寺出口遺跡

所 在 地　熊本市万楽寺町字出口
調査面積　約6,000㎡
調査期間　平成６年４月～平成７年１月

万楽寺出口遺跡は、熊本市万楽寺町（旧北部町）に位置し、金峰山三ノ岳から伸びる細長い丘陵上にある遺跡です。万楽寺出口遺跡は、以前から弥生時代の土器が多く見つかっていたため、弥生時代の村があると思われていました。「熊本スイカ」の産地として全国に名を響かせているこの地域において、今回、畑の整備、住宅地の区画整理などの生活環境の充実に向けた事業が行われることになりましたので、この工事に先立ち県文化課が発掘調査を行いました。

発掘調査は、道路、畑、水路などで削られてしまう部分、給水所が建てられる部分など遺跡が壊される所を中心に行いました。

発掘調査の結果、弥生時代の村が広い範囲で確認されました。弥生時代の中頃の竪穴住居跡とお墓は、多くの土器や石器と共に見つかました。ほとんどの住居跡は、中心に火を燃やしたあと（炉）があり、床を硬く踏みしめ、２本の柱の跡がありました。

土器や石器は、炉のまわりから、置いてあるような状態で多く出てきました。

住居跡のほかに、多くの甕棺と木棺墓及び配石遺構も見つかりました。

甕棺は、熊本県北部で多く見つかる弥生時代の中頃の「黒髪式」といわれるもので高さ70～80cm、直径30～40cm程度の大きさの甕でした。

木棺墓は、板を組み合わせて作られていたもので板を埋めていた溝が確認されました。

木棺墓の中からは、石を磨いて作られた磨製石鏃（矢じり）が見つかりました。これは隅からまとまって出てきたので、ここに葬られている人に供えられていたのかもしれません。

配石遺構は、河原にあるような石を多く持ってきて、円形、方形に並べてあり、何かを祭ったような跡でした。この遺構は壊してしまうのではなく、現地で設計変更をして現状のまま残すことになりました。その性格を調べるため１基を調査したのですが、そこからはなにも確認されませんでした。また、いつの日か、発掘調査が行われる時があるかもしれません。

10号甕棺、検出状況

７号甕棺、１号木棺墓検出状況

配石遺構検出状況

錦野・上揚遺跡

所 在 地　熊本県菊池郡大津町大字錦野
調査面積　約3,900㎡
調査期間　平成６年10月～平成７年３月

白川の中流域に開析された河岸段丘の南側に立地し、調査区はＡ，Ｂの２区に分かれ、東西に相互に約500ｍ隔てて所在します。

西側のＡ区は、表土を剥ぐと、上層に縄文時代晩期の古閑式土器を中心に多数出土し、また下層には若干の縄文時代早期の押型文土器が出土しました。一帯には、江戸時代の洪水により村移り以前の錦野旧集落が存在したとの伝承が残っていますが、南北に狭長な調査区のため、これに関わる遺構の発見には到りませんでした。

東側のＢ区の地勢は、南から北に緩やかな傾斜し、遺跡を抱え込むように、白川が湾曲する流路をなし、このため阿蘇からの颪である「まつぼり風」といわれる強風が、川筋を伝い、一年中この地を直撃する位置に遺跡は所在しています。

この調査区での主な遺構は、焼土を含む、方形あるいは円形の土坑群で、22基出土しました。遺物としては、鉄片、鞴の羽口、砥石、須恵器や土師器の破片、鉄滓のほか「日？」と記した墨書土器が出土していることから、土坑群は、平安時代の鍛冶遺構に関わるものと判断でき、強風と白川の河川交通が、鍛冶遺構の立地に関係したものと思われます。

土坑のうち１基は、強く焼結した鍛冶炉の底面部分とみられ、周囲２メートル四方に銀灰色の細かな鱗片状の鍛造剥片が分布し、これを囲むように７本の柱穴が、胴の張った長方形をなして出土しており、工房の建屋とみられます。

鍛冶工房と炉

永・古屋敷遺跡

所 在 地　熊本県菊池郡泗水町大字永
調査面積　約1,300㎡
調査期間　平成６年７月～平成６年８月

合志川の沿岸に所在し、一帯の通称地名が水溜（みずたまり）、微小地名が古屋敷であり、表土を剥ぐと、果たして地名の如く、地下水位が高い中世の集落跡が出土しました。

遺跡の全景

出土した機構は、合志川の方向に延びる運河とみられる１条の直線状の溝に面して、掘建柱建物跡12棟、井戸跡４基、土坑が立地し、このほか大きな湧水池が出土しました。掘建柱建物には、廂付きの建物が１棟、仏堂とみられる小さな総柱の建物１棟が含まれます。

遺物は、土師質土器、瓦器、輸入陶磁器の破片、銅銭、錨石、坩堝、鉄滓、砥石、石造物残欠および、多数の川原石です。

これらの遺構、遺物からみて、遺跡の性格は、中世の河川内陸港に付随する集落であり、鉄滓の出土から、遺跡の近隣に所在した刀鍛冶延寿屋敷、鬼木製鉄跡とは、生業上の密接な関連が考えられます。

集落は、火災に遇っており、石造物残欠および、屋根押さえに用いた人頭大の川原石が、多数焼けて出土していますが、中でも焼けた宝塔残欠は、井戸に無造作に投げ込まれており、出土状況の特異さからみて、戦乱による火災も考えられます。

古閑北遺跡

所 在 地　上益城郡益城町大字古閑
調査面積　約10,000㎡
調査期間　平成６年４月～平成７年３月

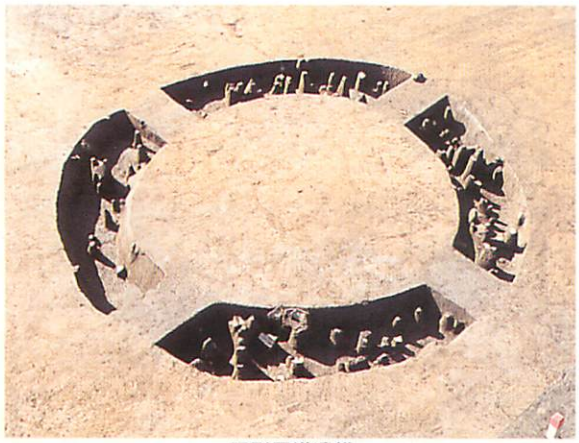
熊本県の商工政策課が計画している、産業展示場建設事業に伴い、発掘調査が実施されました。

調査の結果、縄文時代の終わり頃（約2,500年頃前）建てられたと思われる、竪穴住居跡（地面を掘り下げて造った家）や祭祀に利用されると思われる、円形周溝遺構（ドーナツ状に溝を掘った遺構）と当時の人達が使用したと思われる、縄文土器の破片がたくさん発見されました。

その頃、この遺跡の南側（広安西小学校が建設されたところ、）に湧水地を利用して生活していたようですまた、猪や鹿などを捕まえる陥し穴や、矢の先端に使用された石鏃（主に黒曜石で作られた矢じり）や動物等の皮を切ったりする石匙（ナイフ型の石器）も発見され、狩り等もさかんに行われていたようすがうかがえます。

この遺跡の発掘調査は、平成７年度も続いて実施されます。

古閑北遺跡全景


円形周溝遺構

縄文晩期住居跡

編集後記

年度末の多忙な時期に集められた原稿は、一年間の調査が集約されたものです。次年度は、どんな発掘成果が待っているでしょうか。

妙に元気な調査員たちは、今日も発掘現場で様々な遺物と格闘しています。

第１０号
平成７年３月31日発行
発　行　熊本県教育庁文化課
熊本市水前寺６丁目18-1
☎096-383-1111（6715）
印　刷　(株)新日本印刷

07	教委	教文
③		005